

---

# 美少女戦士になりたかった！ 天界の騎士団

葉山水晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美少女戦士になりたかった！ 天界の騎士団

### 【Nコード】

N0478M

### 【作者名】

葉山水晶

### 【あらすじ】

主人公・市村うさぎは、某美少女戦士と同名だけの平凡な女子高生。しかし、天使を名乗る美少女ギガンデイスと出会い、悪魔のカケラを集める天界の騎士に指名されてから、世界が変わった！

え！美少女騎士に変身じゃなくて、美男子に変身！？性別変わってるじゃん！！

細かいことは気にしないのがベストよ！

めちゃくちゃ重要じゃあ！このアホ天使い！！

他にも、うさぎの巨乳に惚れてる変態幼馴染やクラスメートを巻き込んだり、他の騎士との出会いにより、うさぎの運命が廻りだす！？ラブコメ要素ありの、コメディ時々シリアスなファンタジックヒーロー物、ここに開幕！！

## プロローグ (前書き)

ファンタジックコメディ物です！  
楽しんでいただけたら嬉しいです。

## プロローグ

小さい頃、よく見ていた美少女変身系のアニメだとか  
戦隊ヒーロー物に憧れてた。

平凡な私が世界を救うなんてカッコイイと。

今は、そんな夢を描いてた自分を抹消したい！

\*\*\*\*\*

ここは、東京にも程近い、関東にある夢見台市。程よく都会であるこの街では、近頃変わった犯罪が多発していた。それも、特定の人物たちによって。それは……。

ここは、真夜中の市内にある大豪邸。とある国会議員の本宅であり、純和風の家には、錦鯉まで泳いでいる。しかし、夜中だというのに、家の周りは警官達で溢れかえっている。それは、この家に保管されていた一千万円はくだらない絵画が盗まれたからだ。

「またこの手口か！一体何だっというんだ！？」

指揮を執っているのは、夢見台署刑事課のトップ、雪野太郎<sup>ゆきの たろう</sup>。年齢45歳のベテラン刑事である。今まで数々の事件を解決してきた敏腕刑事<sup>でか</sup>であるが、この事件に関しては、まったく犯人の正体が掴めていなかった。というのも、

「警部、詳細が分かりました。やはり、前の事件と同じく、この奇妙なメッセージカードが残されているのみで、その他の証拠が一切残っていません。」

「やはりか。・・・同じ犯人たちに違いない。しかも相当な知能犯だろう。それにしても、

“この絵画は、我ら天界の騎士団がいただいた”？まったくふざけた輩だ！」

そう、最近、夢見台市内で、この「天界の騎士団」を名乗る窃盗団による被害が多発していた。盗まれる物は、有名な絵画や壺、いわゆる芸術品と呼ばれる物ばかり。しかも、奇妙なのが、

「それで、被害者の方なのですが、犯人の顔を覚えてない上、絵画の行方などに興味はないと。なんでも衝動的に買ってしまった物で、絵画を買ってから家族が怪我を負うなどの奇妙なことが続いていたらしく、そんな縁起の悪いものが盗まれても気にしないそうで・・・」

「この被害者もか・・・。」

そう、盗まれた芸術品は、被害者にとって不幸を呼ぶようなものが多いらしく、誰も被害届を出そうとしなかったのだ。むしろ、呪われているような物を盗んでくれて、感謝したいという被害者まで出る始末だった。

「一体なんだって言うんだ・・・。」

警部の呟きは、夜風の中に消えていった。

\*\*\*\*\*

一方、こちらは、先ほどの大豪邸の程近くにある、とあるビルの屋上。月の光に紛れて、三人の人影が話している。

「今回はハマせずにすんだみたいだね。それにしても、この天界の騎士団なんていうアホなネーミングはどうにかして欲しいんだけどなあ。」

そう発言したのは、綺麗な黒髪にたれ目、少しナルシスト気質もうかがえる美男子だった。

「文句があるなら、あの馬鹿天使に言ってよ！っていうか、今回も任務終わったら早々に姿くらませるし、なんなのよ！！」

地団駄を踏んで叫んでいるのは、金髪に碧眼の王子様風美男子だった。少々女っぽい言葉づかいだが。

「ユキ、地が出てるわよ。アンタは今男なんだから。自重しなさい。」

「・・・ゴメン。」

最後に発言したのは、三人の中で唯一の女の子。綺麗な栗色の髪を二つに高く結う、人形のように愛らしい少女である。萌え系というか、ゴスロリが似合いそうである。

そして、三人とも、とても変わったコスチュームをきていた。黒髪美男子は赤、王子様風美男子は青、そして、栗色の髪の美少女は桃色を基調とした、まるで、近代西洋の軍服のような、揃いの服であった。

「ハイ！皆、お疲れ様ー！！今日も良くカケラを集めてくれましたー！！」

「「「うわっ！！！！」」」

すると、突然、三人の背後に人が現れた。

「ギガンデイス！一体どこいつてたのよ！！」

大層な名前で呼ばれたのは、名前に似合わず、金髪に緑眼をした、巨乳の可憐な美少女だ。三人よりは幼くみえるが、口調からするとそうではないようだった。しかし、何よりの特徴は、その背中に真っ白な翼が生えていることである。

「いやあ、本部に行つてたら、予想外に引き留められちゃってね！でもでも、天使長様も、アンタ達の働きに大変感謝されてたわ！やつぱり三人組になると違うわね！」

スリーマンセル

「ホント、機嫌がいい時とそうじゃない時の差が激しいよねえ。（ボソッ）」

「・・・。なんか言つた？？（にっこり）」

「イエナンデモないです！！」

天使な美少女は、腹黒女王でもあった。

「ともかく、今日の任務はこれで終わり！変身解いていいわよ。」

そうギガンデイスが言つと

「「「神の御名の元に。リリース解除！」」」



三人が唱えると、一瞬光を放ったかと思うと、そこには、さつきとは異なる三人の姿があった。

「・・・ほんと、性格まで変わるのとはどうかと思いますけどね・・・」

先ほどの黒髪美男子が居たところには、学生服をきた、髪がぼさぼさで、いかにもオタクな雰囲気醸し出す少年。

「それは、あなたの理想の姿になってるんだから、少しぐらい変わっても当然でしょ。まあ、あたしは、あんまり変わんないからいいけど。コスチュームのスカート丈はどうかして欲しいけど。」

そう発言したのは、先ほどの栗色の髪の美少女の位置に現れた、黒髪ロングヘアーのスレンダーな美少女である。顔立ちはさほど変わらないが、先ほどの少女より、大人びているし、なにより醸し出す雰囲気から静に変わったように、落ち着いたものになっている。ちなみに、この少女は校章の入ったブレザーにチェックのスカートという制服姿である。

「二人ともいいじゃない！性別が同じなんだから！私なんか、女から男になるのよ！！あんの腐れ天使のせいで！！」

最後に、王子様風美男子がいたところに現れたのは、黒髪セミロングで、ちよつと巨乳な童顔の少女である。いたって平凡な容姿のため、黒髪美少女の隣では霞んで見えるのが悲しい。ちなみに黒髪美少女と同じ制服を着ている。

「あら、だって、うさぎの希望どおりのはずじゃない？美形で世界を救う主人公みたいな容姿がいいって言ったじゃない？」

「性別が変わるなんて聞いてないわよお！昔流行ったセーラー戦士みたいな美少女戦士がよかったのに　　！！」

「いいじゃない？名前は同じ“うさぎ”でしょ？？」

「うう！ギガンデイスの大馬鹿ヤロー！！」

\*\*\*\*\*

私の名前は、市村うさぎ。平凡な高校生。肌が白いから、ユキウサギとか、ユキとかよばれてます。名前の由来は、昔に流行った某美少女戦士アニメの主人公から。両親もなんでそんな名前つけたのかわかんないけど、そのおかげで、昔からヒーロー物が好きだった。

だけど、そんな大層な人にはなれるワケないって思ってたんだ。

あの金髪天使・ギガンデイスに出会うまでは

！！

というか、やっぱり美少女に変身したかったよおお！！！！

そんなわけで、うさぎ達の物語が、今始まる！

## プロローグ (後書き)

次回からは、過去主人公うさぎと天使の出会い編です。

**第1話 金髪の転校生1（前書き）**

第1話前半です。

## 第1話 金髪の転校生1

空から降ってきた金髪グラマラスな美少女との同居！？って、なんか恋でも始まりそうな話だけど、私、女ですから！！

\*\*\*\*\*

プロローグの時から遡ること数ヶ月。主人公・うさぎは、その日も朝から平和に登校しようとしていた。

「うさぎ、おはよう！今日も変態ロリコン野郎共から守ってやるからな！安心しろよ！！」

そう言つて、うさぎの家の隣の家から突進してきた熱血少年の名前は、雪野京平<sup>ゆきのきょうへい</sup>。うさぎと同じ高校でさらにはクラスまで同じという腐れ縁ぶりを發揮している、所謂うさぎの幼なじみである。

「おはよう京平。もう朝からそんな大声出さないでよ……。というか、平凡顔な私が変態ロリコンとかに縁なんてないって！相変わらず大袈裟なんだから。」

そううんざりしながら言つたうさぎに対して、

「何言つてんだよ！お前は童顔なくせして巨乳なんていう、めっちゃ俺好みの体型してんだぜ！他の野郎が狙わない訳がない！っわけで、早く俺と付き合おうぜ？」

そう言つて京平は、うさぎの肩を抱こうとしたが

バッシーン！

「なにがそういうわけなのよ変態！つーか胸触らないで！むしろ京平が私に近付かないでよ、イヤラシイ。こんの顔だけ男！」

そういつて京平をノックダウンしたあと、高校への道を歩いていく。

熱血ではなく、実はちょっと変態まじりな少年は、確かに顔は一級品だった。今時流行りの髪型に、染めた明るい茶髪。もともと色素の薄く、整った顔には厭味なく似合っていた。

京平は、学校には一時期ファンクラブもあった程だが、本人がうさぎ以外に興味なく、しかも外見に似合わず変態じみたセクハラをうさぎに繰り返していたため、いつのまにか変人扱いされるようになりファンクラブもいつのまにか解散していた。

そんな少年は、慣れているのか、すぐに復活し、めげることなくうさぎの後を追いつけていく。

「待てようさぎー！走ったら転ぶぞ！」

こうして追い掛けあいながら高校まで仲良く？毎朝登校するのだが、その日はイレギュラーな事態が起こったのだ。

「きゃあああ！その走ってる女！どいてー！！！」

突然少女の声が聞こえたためうさぎは辺りを見回したが、後ろから走ってくる京平以外、誰もいない。

すると京平の焦った声が聞こえた。

「うさぎー！上だ！危ないっ！！」

・  
京平の声にうさぎは顔を上方に向けると、顔一杯に金髪美少女が・

ゴーンッ！！！

少女とうさぎの頭がぶつかったところで、うさぎの意識は途絶えた。

「うさぎー！！」

\*\*\*\*\*

「うーん、あれ？天国・・・？！」

「じゃなくて保健室よバカ。」

冷めた口調で話しかけてきたのは、うさぎの友人である、城崎ユイ<sup>きのさき</sup>だ。

「あつユイ！おはようー。ていうより、私どうやって学校に？確か変な物体と衝突して気絶しちゃった気がするんだけど・・・。」

ガラッ

「うさぎー！もう大丈夫か！？俺がしっかり運んできてやったんだぜ！」

保健室に入ってきたのは、京平だ。

「京平が！？！」

「なんでも血相変えて保健室に飛び込んできたらしいわよ。今は留守にしている保険医がいった。わたしはその保険医の変わりに付き添ってたの。一応保健委員だしね。」

「ほんとびつくりしたんだからな。イキナリ道で倒れるからさ。」

「え?! 違うよ! 京平も見ただじゃない! 空から変な金髪の人が降ってきてさ、私と衝突したのを!」

「はあ? そんなの見てねーよ。いきなりお前が倒れちゃったんだよ。だから俺が高校までとりあえずはこんだんだから。」

「お姫様だつこだったらしいわよ。」

「ちょっと京平! はずかしいじゃない! …でも運んでくれたのは、ありがとう。」

「ぐはっ! ツンデレってやつか!? やっぱお前って俺のコト…」

「うるさいわよ変態。」

冷静なユイのつつこみ。そんななか、うさぎは、

（絶対あれは人だった! なのに京平は覚えてないなんて…。どういうこと?）

「とりあえず、目が覚めたんなら教室行くわよ。今ならまだ一時間目に間に合うし。」



そうして三人が教室に戻ると、まだ担任が朝のホームルームをしているところだった。

「おお！高村は大丈夫だったか？ちょうど今から転校生の紹介をするところだ。三人とも席つけ。」

「転校生？」

不思議に思い、うさぎが教壇に目を向けると・・・

（あれ・・・？どつかで見た気が。）

そこに立っていたのは、とても顔の整った美少女だった。スタイルもモデル並で、髪の毛は金髪。まるで絵画にでてる愛らしい天使のようだ。クラスの大半の男子は、そんな転校生に鼻の下を伸ばしている。

「今日からお前らのクラスメートになる、あまかわれな天河怜奈さんだ。仲良くしろよ。というわけで、天河自己紹介しろ。」

「はい。・・・紹介されました、天河怜奈です。気軽にレナって呼んでください！」

そういつて、可愛らしく笑顔でお辞儀をした。その笑顔にクラスの男子はノックダウンだった。

「天河の席は、今入ってきた高村と雪野原の間だな。」

そういわれた転校生は、二人の元に歩いていく。

「うさぎ！俺は外見には騙されないから！うさぎ一筋だからな！」

京平は、必死にうさぎにアピールしていたが、

（やっぱり、どこかで……。金髪……。金髪！？そくだ！朝のあの！）

うさぎは、必死に思いたそうとしていた。

「よろしくね。雪野原くん……。高村さん？」

転校生が二人に話しかける。うさぎはその声が聞こえてないようだったが、転校生に気づき、

「ねえ、今日の朝、私達ぶつかったよね！？」

そつうさが言うつと、うさぎにしか見えない角度で、転校生の顔が変わり、どこか笑顔に寒気を感じるものになった。

「……。違うと思うけれど？（あなたには天術が効かないのね……。）ねえ、高村さん、そんなことより、あとで校内を案内してくれない？まだ全部の校舎を回ったことがないの。」

「（やっぱり人違い？）うん。いいけど……。」

「やった！約束ね！！」

転校生は笑顔になって、席についた。

（一人目は、あの女の子に決定ね……。！）

一人、転校生は妖しく微笑んだ。

**第1話 金髪の転校生1（後書き）**

後半へ続く！

## 第1話 金髪の転校生2（前書き）

前回からだいぶ間が空いてしまいました・・・orz  
やっとこさ続きます。

## 第1話 金髪の転校生2

謎の美少女レナとうさぎは、それ以降放課後まで接触がなかった。というより、レナの周りにいる男子達のせいで、近寄れなかったのだが・・・。

そんなこんなで放課後を迎え・・・

\*\*\*\*\*

「じゃーな、うさぎ！他の男と浮気すんじゃないぞ」

と、京平は部活に向かい、

「それじゃあ、バイトあるから。また明日ね。」

と、ユイは足早に教室を出ていき、行動がのんびりしているうさぎは、ぽつんと一人教室に残るはめになっていた。そんなうさぎが帰ろうと席を立とうとした時、

「市村さん。朝言ってた学校案内を頼めるかしら？」

と、謎の転校生が話しかけてきたのだ。

「う、うん。喜んで！（なんだか謎な子だなあ。朝のこともあるし・・・。）」

うさぎは、転校生を不思議がりながらも、案内することになった。グラウンドからは、部活生の声が聞こえるが、校内は、誰も居らず、静かで少し不気味だった。

うさぎ達の学年棟を抜けて、音楽室や職員室などがある特別棟まで来た。

（話してみたら、明るくて普通の子だなあ……。朝のは見間違えたのかな？）

などと、うさぎが納得しかけ、

「ねえ市村さん。これからうさぎって呼んでもいい？私のことはレナってよんで！」

「うん！よろしくね、レナ！」

と、レナとの友情が生まれたと思ったそのとき、

ギヤアアッ！！

「「！！」」

「なに！？今の叫び声！！」

「どうやら、ここにも居たみたいね……。うさぎ！叫び声の聞こえた方に案内して！！」

「え！？……この廊下の奥だから、えっと……。校長室かも？！……こっちだよ！！」

二人は急いで校長室に向かった。

ガラッ

「失礼します！！校長先生大丈夫ですか・・・？！って」

先に入ったうさぎを押しつけてレナが中に入る。するとそこには、

グルルルウ！

目を見開き、まるで獣のように威嚇する校長の姿があった。

「ちょっと遅かったか・・・。」

「レナ？！どういうこと！？」

「アイツは低級の魔物なの。しかも人に憑りつくタイプのね！！」

「ま、魔物・・・！？そんなファンタジックな・・・。」

「これは現実よ！さあ、こいつを封印しなくちゃ・・・。」

「え！？どうやって・・・？」

「まあ、見てなさいって！これからはうさぎにもやってもらふことになるんだから・・・！」

そういつて、レナがぶつぶつと何かを唱えると、

「なにそれ？！剣！？」

そう、レナの手には、華美な装飾の西洋式の剣が握られていた。



とその時、

ガルルッ！ガウッ

これまで威嚇していた、校長に憑りついている魔物がうさぎの方に  
向かっていく。

「きゃあああっ！」

「うさぎ！！この剣を使って！！！」

「そしたら校長先生が・・・！！！」

「大丈夫だから！！早く！！！」

「う・・・うん！」

そう言つてうさぎは投げ渡された剣を目の前に迫った校長に振りお  
ろした。

ザシュッ

グギヤアア！！

ドサリッ

なぜか校長は、無傷のまま倒れ、黒い狼のような影が現れた。

「一体・・・?!」

「そいつが憑いていた魔物自身よ！さあ、切り離れたから、あとは封印するだけね！！そいつは弱いから、憑いてなきや私達には攻撃できないし、もう大丈夫。うさぎ！なんでもいいから、それらしい言葉をかけて、そいつを剣で斬るのよ！！」

「なんだかよく分からないけど、・・・私がやらなきゃいけないの？レナは・・・？」

「ホントは、うさぎには説明してからと思ってたけど、経験積む方が大事だしね！さあ早く！！」

「もう！良く分からないけど・・・なんか小さいころやってた美少女戦士モノみたい・・・。よし！

『セイント・フラッシュ！魔よ地に帰れ！！』」

ザシュツ

すると、狼もどきは光をはなち、そこには、黒い石のようなものが現れた。

「上出来よ！といっても、ホントに弱い低級のやつだったけどね。」

「この黒い石は・・・？」

「それは。悪魔のカケラ。通称ブラックルビーよ。さあ、今から説明するわ・・・。場所を変えましょう。」

「校長先生は大丈夫なの？」

「じきに目覚めるわ。魔物の記憶も残ってないだろうし。」

「それってどういう・・・？」

「それも含めて説明するわ。・・・私の正体も含めてね・・・。」

そう言つて・レナは校長室を出て、うさぎも後に続いた。

\*\*\*\*\*

（一体今のはなんだったんだ・・・？あの二人は・・・同じクラスの転校生に、市村だ！！）

「これは、大スクープになるぞ・・・。」

そうつぶやいて、去っていったのは、カメラを首から下げた、ぼさぼさ頭の男子生徒だった。

一つまた運命が動きだす。

## 第1話 金髪の転校生2（後書き）

前回から更新がだいぶ空いてしまってますみません。

そんな中、読んでくださった皆さん、ありがとうございます。

大学も夏休みに入りましたので、これからは、また頻繁に更新していこうと思います！！

次で出会い編は終了です。まだまだ序盤ですが、頑張ります！

## 第1話―金髪の転校生3（前書き）

これにて、一応レナとの出会い編は終了です。

## 第1話―金髪の転校生3

化け物と出会った翌日。京介は、珍しく部活の朝練とやらに行ったりしく、うさぎは一人登校した。自分の下駄箱を見ると、一通の封筒が入っていた。中には、昨日の黒い魔物と自分達が写っている写真と、一切れのメモ。

（昨日の知られてたんだ！バラされなくなれば、放課後に報道部部室って……。というか、うちの学校に報道部なんてあったっけ？）

「とりあえず、レナに相談しなきゃ……。！」

そうつぶやきながら、うさぎは教室に向かうまで、昨日のレナの話を思いだしていた。

\*\*\*\*\*

うさぎとレナは、人気のない校舎の裏にあるベンチまで移動してきた。

「まず、私の正体から正直にいうわね。・・・私は、天界から、悪魔対策のために送られてきた天使なの。」

「て、天使い？！そんな非現実な……。！」

「でも、うさぎも見たでしょう？あの魔物たちは、上級悪魔たちによって創りだされたやつらなのよ。」

「・・・確かに、あの光景を見たら、信じなきゃいけないとは思っ  
けど。でも、天使と悪魔なんて、ファンタジーじゃあベタな対立し  
てるんだね。」

「ベタ・・・？まあ、先代の魔王が魔界を治めていたときは、人間  
界に魔物が入り込むなんてことはなかったから、天界と魔界が対立  
することはなかったんだけど・・・。代が変わってから、状況が変  
わったの・・・おそらく、今の魔王はなんらかの目的を持って、  
人間界に干渉しようとしてるのよ。負の意志を持ってね・・・。」

「へえ・・・。なんだか複雑そうだね。・・・そしたら、レナ達は、  
その魔物の退治が仕事なの？」

「退治するのは、主に騎士の仕事よ。私たち派遣天使は、人間界で  
騎士に相応しい人を選んで、自分の能力を分け与えて、騎士に任命  
して指令を出して、悪魔の石、つまり魔物たちの核を回収させるこ  
と。それからこの人間界に來ていると言われる悪魔たちを倒して、  
魔王の目的を探りだすことが使命なの。」

「騎士・・・？それってどうやって選び出すの？」

「私たち天使の力である天術が効かない人間を見つけ出すの。さっ  
きの校長や、朝に使った記憶操作も天術の一つなのよ。だから、」

「てことは、私って・・・！」

「そう、うさぎは、私の天術が効かなかった人間！・・・私の第一  
号の騎士よ！！」

「待つてよ！これって拒否権は・・・？」

「うさぎは、人間界がどうなってもいいの・・・！？（うるうる目）」

「（そんな庇護欲を刺激する顔されたら・・・！！それに）確かに、悪魔？とやらに人の世界をいのようにされるのは、嫌だけど・・・。」

「それなら決まりよ！一緒に人間界を守るのよ！」

「（なんだかいいように丸めこまれたような気もするけど。）でも、能力を分け与えるって、一体どうするの？」

「分け与えると言っても、魔物を退治するための能力を込めたアイテムを私がうさぎに授けるだけよ。あとは、うさぎの働き次第で、アイテムが強くなっていくけど。」

「それって、さっきの剣みたいなの？」

「そう。でも、このアイテムは、使用者の意志によって色々形状が変わるの。普段はペンダントのようになってるのよ。」

そういつて、レナはうさぎに、輝きのない宝石のようなものが付いたペンダントを渡した。

「それじゃあ、うさぎ。今から任命式を簡単にするわ。私に向かって膝をついて。一応、私が騎士としてのうさぎの主人<sup>マスター</sup>だから。」

「なんか、本格的なんだね。・・・でも、レナに仕えるって、変な気分・・・。」



「形式的なものよ。．．．私は、騎士は仲間だと思ってるから。さあ、じゃあ始めるわよ。」

「うん。」

そういつて、うさぎはレナに膝をついて頭を下げる。

「純天使レナの名において、この者に力を授ける。天界の騎士として、誇り高くあれ。」

そういつて、レナはうさぎの頭と、うさぎの持つペンダントに触れた。すると、ペンダントは一瞬眩い光を放ったかと思うと、直後宝石には、不思議な光が宿った。

「これで、このペンダントはあなたのものよ、うさぎ。」

「不思議な色だね。．．．それに、天界の騎士って。．．．なんか恥ずかしいなあ。」

「まだまだ、うさぎは半人前になるけどね。この人間界には、何人もの天使が降りてきてるし、それぞれもう騎士を任命して、実際に経験を積んでる騎士たちも多いから。」

「なんだか、本当に、アニメで見た美少女戦士みたい。．．．って、そつえば、変身したりしないの!? 私は記憶操作なんて出来ないから、正体が簡単にはれちゃうよ!」

「そつえば、そうね。正体がばれると何かと大変そうだし。．．．よし! そしたら、騎士に相応しい変身が出来るように、ペンダント

に能力を上書きするわ。うさぎの希望は？」

「それって、コスチュームだけ？」

「そんなわけじゃない、顔がばれないようにするんだから。体型も顔も変わって別人になってもらうわ。」

「そっそしたら、顔は美形で！スタイルもよくて！それから、かっこいい衣装にして！！（クールな女主人公、みたいな！キヤー！！）」

「（最後のほうは、よく聞こえなかったな・・・。）わかったわ。美形でかっこいいのね。・・・ペンダントを貸して。」

「（・・・はっ！妄想の世界に行っちゃってた。）う、うん！どうぞ！」

すると、レナはペンダントに力を込める。

「はい。私が想像する姿を変身力として入れておいたから。戦う前には、『チェンジ！』ってペンダントを握って唱えるのよ。」

「わかった。」

「・・・これから、よろしく頼むわよ、うさぎ。」

「・・・うん。私、頑張るから！魔物なんて、けちよんけちよんにしてやるわよ！」

「ふふふっ！その意気よ、うさぎ！・・・」

\*\*\*\*\*

うさぎが、昨日の出来事を思い出しているうちに、教室の前まで着いた。教室の扉を開けようとすると、背後から声がかかる。

「放課後の約束は、忘れないでくださいね。・・・クラブ棟の端ですから。」

と同時に、その声の主は素早く、うさぎ達の教室へと入っていった。

（あの後ろ姿は・・・）

それは、元京介のファンクラブ会長である、宝華院ほうかいんしやうこ祥子の幼馴染で、彼女の半ストーカーなどと噂される、大門だいもん上総かすさだった。

その後、登校してきたレナに事情を話すと、

「とりあえず、放課後に私達二人で会って、記憶を天術で操作しましょう。」

そうして、放課後を迎える。

## 第1話―金髪の転校生3（後書き）

次回からは、根暗な報道部部长、大門くんが絡んできます。

変身シーンが書きたくてウズウズしてるんですが、少しだけ先になる予定です。

天術の説明が曖昧ですみません。天術＝魔法みたいな感じで書いてます。

## 第2話 彼と彼女の事情1（前書き）

久々の投稿となります・・・。

呼び出した大門くんのお話<sup>1</sup>。まだ続きます・・・。

## 第2話 彼と彼女の事情1

「ねえ、ずっと一緒にいてくれる？」

「もちろん！僕が、祥子ちゃんのこと、ずっと守るからね！」

「そしたら、約束！ゆーびきーりげーんまーん…」

「「ゆーびきつた！…あははっ！」」

そう、それは幼い約束にすぎないけど、僕は、君を守るよ。

\*\*\*\*\*

(うさぎ視点)

大門ちゃんと約束していた放課後になった。報道部部室は、部室棟の目立たないところにあった。

「いい？うさぎは、大門とかいう男の注意をひきつけておくのよ？その間に、その男に天術をかけるから。」

「うん。わかった！」

「よし！それじゃ、あたしは隠れておくから。上手くやるのよ。」

そこへ、大門くんがやって来た。

「さあ、約束通り来たわよ。」

「へえ。早かったですね。でも、もう一人の転校生がいないようだけれど?」

「ちょ、ちょーっとトイレ行ってるのよ。でも遅れてくるから。」

「ふーん。まあいいか。君にだけでも、面白い話が聞けるだろうし。」

「その前に、今朝の写真、あの写真のデータを全て消してほしいの。その条件を飲んでくれるなら、なんでも話すわ。(レナ、まだ術かかんないのかな?)」

一方、レナは、大門から見えない位置で術をかけようとしていたが、

(天術が効かない!? そんなバカな。まさか、この男も…)

「それは、話を聞かせてもらってからだね。」

「(どうすりゃいいのよ! レナー!)」

その時、死角となっていた場所から、レナが現れる。

「レナー!」

「うさぎ。この子も適合者だわ……。」

「えっ! てことは、仲間になるってこと!?!」

「この子が納得してくれるならね。でも、うさぎみたいに単純じゃなさそうだし。」

「単純って!」

「こほん。二人で何を相談しているのかな。」

「あつ!ごめんね、大門くん。でも、私達に協力して欲しいの!」

「協力?」

「アンタは、天術の効かない、騎士になれる能力を持つてるのよ。」

それから、レナは大門に、うさぎに話したように、この前の出来事を含めて話した。

「つまり、正義のヒーローよろしく、僕にもその悪魔退治とやらを手伝ってほしいと?」

「正確には、悪魔の石の回収だよ、大門くん。」

「・・・どっちでもいいですよ。」

「それで、協力してもらえる?」

「お断りします。」

「な、なんで!??」

「面倒だからにきまつてるでしょう。僕はね、スクープやらオカルト話を追うのは大好きですよ。でもね、僕自身がスクープの種になるようなことは大嫌いです。特に、僕に関係ない話でね。」



「でも、悪魔の力のせいで、困っている人が大勢出てくるんだよ？」

「それでも、関係ないですから。わざわざ身の危険をさらす気にはなりません。それに、正義のヒーローなんて僕の柄じゃないからね。」

「本人が、そういうならしかたがないわね。」

「レナ・・・！」

「心配しなくても、写真のデータは消しておいてあげますよ。考えてみたらこんな写真、合成だと疑われるようなものだし。そんなファンタジックな話、信じる人もいないでしょうからね。口外もしませんよ。さあ、話も済んだし、もう出て行ってください。一応、話聞かせてもらって、ありがとうございました。」

そういつて、大門は、うさぎたちを部屋から追い出した。

「レナ・・・。良かったの？」

「ふう。しょうがないわ。本人にやる気がないようじゃ。」

\*\*\*\*\*

（大門視点）

パタンツ。

全く、スクープだと思ったけど、とんだ無駄足だった。悪魔に天使？正義のヒーロー？馬鹿馬鹿しい。あの二人の正体は暴けても、それに協力しろだなんて。

「ヒーローなんて、僕はなれっこないのに。」

好きな女の子一人すら、守れないのだから。

ピリリッ

「はい、もしもし？ ああ、祥子様。 え？ 生徒会室？ 今からですか？  
…すぐ行きます。」

僕は、彼女に従うことしか出来ないのだから。

## 第2話 彼と彼女の事情1（後書き）

投稿、遅くてすみません！読んでくださる方、お待たせ致しました。  
・・。

次は、大門さんと宝華院さんの幼馴染話がメイン？かもしれません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0478m/>

---

美少女戦士になりたかった！ 天界の騎士団

2010年11月23日11時17分発行